

コラム

貴重書活用授業を体験して

つだ まゆみ
津田 真弓
(経済学部教授)

本物の持つ威力。今はインターネット上で世界中の図書館や博物館の所蔵資料を簡単に見られる。けれど学習効果でいえば、画面の中の画像はもちろん、展示ケースのガラス越しより、目の前にある本物の方が遙かに高い。

2015年度に私が担当した江戸時代の出版文化を扱った国文学の授業では、毎回そのジャンルの原本を見せ、古典籍は単に文章を読めばいいのではなく、本そのものが制作され享受されてきた歴史を伝える資料だということを学ばせた。ジャンルの違いが外形の違いにも影響している江戸時代の本は、学生に本とは何かを考えさせる良い教材になった。

教室に持って行ける古典籍は文化財とはいかないから、一年の集大成として、貴重書室と斯道文庫の協力を得て、慶應の宝を見る機会を設けた。斯道文庫が学内でやっている展示に合わせ（「元和偃武400年 太平の美——書物に見る江戸前期の文化」2015年11月）、貴重書活用授業を申し込んで、貴重書室にある出版文化史的に重要な品々を我々のため

けに陳列していただいた。今思い返しても、とても贅沢この上ない授業であった。そもそもこれだけの資料がある場も少なければ、積極的に授業に協力しようという機関も少ないだろう。そういう学舎に学んだ幸せを学生の記憶に残せたのも収穫の一つである。

幸せな学生には、慶應所蔵の古典籍を使った紙上の展示会をレポートに課した。企画意図と10の展示品でいかに古典籍の世界を伝えるか。貴重室に『文正草子』の諸本を見比べに行く者、高校生が古典文学を好きになる展示を考える者。ジャンル・地域・作者・テーマと、それぞれの切り口は違うが、各自の問題意識を反映し、見応えがある企画が並んだ。レポートにはデジタル画像の検索が必須となったが、本物とそれを人に見せるプロの手並みを知ること、インターネットで見る古典籍の画像の意味が彼らの中で変化したと思う。デジタルの利点と、本物の利点。その双方を学ぶ機会に今後もなればと願っている。